

三木先生を偲ぶ

大塚 恭 男

「三木先生がお亡くなりになりました」との電話を長門谷さんからいただいたのは昨年十二月二十一日のことだった。その夜が御通夜とのことで真柳君と二人で日本キリスト教団堺川尻教会に行き、献花をした。先生の大きな写真が掲げられていたが、私の存じあげていた先生よりはるかにお年を召されているように思われた。私が先生に始めてお目にかかったのは昭和四二年春の名古屋での医史学会総会の時のことなので、四半世紀にわたるありがたい学恩を賜わったことになる。

このたび先生の『朝鮮医書誌』および『朝鮮医学史及疾病史』をあらためて眼を通してみたが、前者の方には私あての私信がはさまれており、後者の方には御自分でペンをとられて誤植を訂正されていた。

先生はまた敬虔なクリスチャンであり、臨床医家として医の倫理に一家言をもっておられた。先生とほぼ同じジェネレーションで九大で三年先輩にあたられる太田典礼先生とは医史学会の折、医の倫理をめぐってしばしば論戦を交えられた。もとより個人的には親しい間柄のお二人で含むところは何もないので、難しい報告に眠気を催してきた会場を沸かせたものである。

医史学会は領域が広いので、異った領域の演題になると殆ど理解できないことが多い。三木先生のような学者でもそうで、講堂の最前列に坐っておられながら、ひびきわたる様ないびきをかいて眠られることがあった。講演が終わって

照明がつくとぼつと眼をさまされるが、あまり悪びれた様子もない。何しろ大先生なので注意するわけにもいかず、「先生、いびきが大方はでだったですよ」と言うぐらいだった。

学会が終ると、「大塚、軽くやるか」などと声をかけてくださり、小料理屋などで飲ませてくださった。そんな折に朝鮮のお話などを聞かせていただいたものである。

私は漢方の診療をやっている関係上、中国の医学については多少の知識を持っているつもりだが、中国と日本を結ぶ所に位置する朝鮮の医学については殆ど知るところが無かった。三木先生は「不通朝鮮医学、不可以説日本及中国医学」と記されている。

先に医史学の「いろは」を教えてくださいくださった小川鼎三先生が亡くなられ、今日また朝鮮医学史の権威であられた三木先生を失い、その淋しさは表現しがたいものがある。

私の現在奉職している北里研究所附属東洋医学総合研究所には、臨床研究部、基礎研究部と並列に医学史研究部をもっている。東アジア、特に中国と日本の医学史を主な研究目標としてきたが、三木先生のお言葉のように朝鮮医学史をも研究しなければならぬと考えている。

先生の御霊の安らかならんことを念じつつ追悼の言葉とする。

一九九三年一月

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)